

令和元年度

調査研究助成事業報告書

◆ 栃木県立益子特別支援学校 P T A

全国特別支援学校知的障害教育校 P T A 連合会

本校における防災について考える

～もしもの時に備えるPTA活動～

栃木県立益子特別支援学校PTA

1 はじめに

栃木県は、関東地方の北部、群馬県、茨城県に並び位置し、世界遺産や国宝にも登録されている日光東照宮で有名な日光社寺があり、華厳の滝や鬼怒川温泉などの数々の観光スポットや、バスケットボールBリーグ初代チャンピオンにも輝いた宇都宮ブレックスを有する人口約195万人の県です。さらに本県は、いちごの生産高が50年連続日本で児童生徒の通学圏内にある真岡市では、2020年に「全国いちごサミット in もおか」が開催されます。

益子焼で有名な益子町にある本校は、昭和56年に開校した、知的障害のある児童生徒を対象とする特別支援学校です。児童生徒数は191名で、4台のスクールバスで通学し、中学部・高等部の生徒の一部は、公共交通機関、保護者の送迎などで自力通学しています。また、PTAも、学校の歴史と共に、児童生徒の成長や学校のあゆみを見つめ支えながら現在に至り、まもなく創立40周年を迎えます。

なお、過去には、益子町や隣接する市や町では、台風により町の中心を流れる河川の氾濫や竜巻による甚大な被害を経験しています。



2 本研究の課題・目的

改めて、本校の防災・減災についての課題を洗い出してみると、次のことが挙げられます。

- ・ 現在の本校における防災・減災については、児童生徒が登校して下校するまでを想定して取り組んでいるが、児童生徒を引き渡す保護者の安全面を想定していない側面がある。
- ・ 危機管理という観点から、児童生徒を安全に保護者に引き渡すということが大前提であるが、通信障害で連絡がしづらい、また、本校に向かう移動中などに事故などがあつては、児童生徒の安心安全にはつながらない。
- ・ 保護者の防災・減災に関する意識について、把握がされていない。

これらのことから、研究の目的として、

- ① 各家庭での防災・減災への現状の洗い出しを行い、「防災・減災についての意識」や「困り感」を明確にする。（防災・減災に対するアンケートの実施）
- ② 研修委員会や居住地域（地区活動）などでの取組から、防災・減災に対する研修や体験活動を通して、気づきや意識の向上を目指すとともに、防災・減災意識の共有を図り、有事の際の連携（保護者同士・保護者と学校など）を強化する。
- ③ 居住地域や通学路の緊急時サポートブックやハザードマップなどを作成し、各家庭で活用する。
- ④ PTAによる防災・減災の取組をさらによりよい形にし、定着を図る。

これらについて研究を進め、保護者主導で主体的に取り組めるPTA活動を目指していきたいと

考えます。

3 PTAの取組

本校のPTAは、4月下旬に行われるPTA総会から新年度の活動がスタートし、役員会、理事会、専門委員会(総務・広報・研修・環境・バザー・イベント)から成り立っています。また、地域の中での交流と相互理解を目的とした五つの地区での地区活動や、学校行事への参加を行うなど、それぞれが児童生徒のために熱心に取り組んでいるところです。

東日本大震災においては、内陸部にある本校でも、かつて経験したことのない大きな揺れを感じ、教室の床が波打ち、さらには、校庭に亀裂が走り、学校施設の一部が大きく破損しました。町では、屋根や塀が崩れたり、停電のため信号機が機能を停止して交通が混乱すると共に、コンビニエンスストアやガソリンスタンドでは食料品や燃料を求める人々で混乱していました。

携帯電話も通信障害により遮断されて保護者との連絡が取れず、校庭の仮設テントで避難待機していた児童生徒の保護者への引渡ししが随分と遅くなったことを記憶しています。

このことを契機に、PTA総会や保護者アンケートなどで、「引渡し訓練」や「通学路の安全確認」などの重要性や危機意識の声が高まるとともに、学校では児童生徒への防災教育、引渡し訓練、備蓄品やヘルメット・防災グッズなどの整備が少しずつ整備されてきました。しかし、まだまだ十分ではない状況です。

では、①保護者アンケートの実施②防災教育の取組③地区活動の取組、以上の3点について、アンケートの結果と考察を御紹介します。

① 保護者アンケートの実施

先の大震災から8年が経ち、あらためて防災・減災に対する保護者の意識や備え・不安などについてアンケートを実施しました。アンケート項目については、以下の7項目です。(資料1(21P)参照)

- ア) 今住んでいる地域で、大地震や豪雨などの自然災害が起きるのではないかと不安に感じることはありますか。
- イ) あなたの家庭で、大地震などの自然災害に対する備えは、どの程度できていると思いますか。
- ウ) 具体的にどのような備えをしていますか。
- エ) 大地震などの自然災害に備えて、あなたが普段から行っていることはなんですか。
- オ) 自然災害時に備えて、家族間のルールなどがありましたら教えてください。
- カ) 防災・減災に関して、現在あなたがお困りのことや知りたいことはなんですか。
- キ) その他

防災・減災に関するアンケートの集計結果と考察については、次のとおりです。



<職員室の様子>



<木工室の様子>

防災・減災に関するアンケート集計結果(2019)

益子特別支援学校PTA

回答数 164名 (会員数 182名)

学部 小 64名 中 23名 高 77名
 地区 真岡 72名 二宮 7名 宇都宮 14名
 芳賀・市貝 29名 茂木・益子 18名 不明 5名

真岡 72名	二宮 7名	宇都宮 14名
小 24	小 1	小 5
中 13	中 3	中 2
高 35	高 3	高 7
芳賀・市貝 29名	茂木・益子 18名	不明 5名
小 15	小 7	小 2
中 3	中 1	中 1
高 11	高 10	高 2

1 あなたは、今住んでいる地域で、大地震や豪雨などの自然災害が起きるのではないかと不安を感じるがありますか。

学 部	小学部	中学部	高等部			
・大いにある	(14)	(4)	(16)			
・ある程度ある	(38)	(15)	(43)			
・あまりない	(9)	(3)	(16)			
・まったくない	(3)	(1)	(2)			
地 区	真岡	二宮	芳賀・市貝	茂木・益子	宇都宮	不明
・大いにある	(7)	(1)	(3)	(4)	(5)	(3)
・ある程度ある	(31)	(9)	(17)	(9)	(3)	
・あまりない	(6)	(4)	(6)	(2)	(1)	(2)
・まったくない	(4)	(0)	(1)	(1)	(0)	

2 あなたの家庭で、大地震などの自然災害に対する備えはどの程度できていると思いますか。

学 部	小学部	中学部	高等部			
・十分にできている	(0)	(0)	(3)			
・ある程度できている	(14)	(4)	(7)			
・あまりできていない	(42)	(15)	(55)			
・全くできていない	(6)	(4)	(11)			
地 区	真岡	二宮	芳賀・市貝	茂木・益子	宇都宮	不明
・十分にできている	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	
・ある程度できている	(10)	(1)	(5)	(4)	(2)	
・あまりできていない	(33)	(7)	(21)	(17)	(13)	(3)
・全くできていない	(6)	(2)	(5)	(3)	(2)	(2)

[考察]

- ・ 1の問いについては、「大いにある」「ある程度ある」と回答している方が大多数を占めていました。反面、2の問いでは、「あまりできていない」「全くできていない」と回答する方が多く、また、地区で見ても、同様でした。
 - ・ 東日本大震災を契機に、現在まで様々な災害が各地で起き、メディアなどにおいて発災確率などの災害に関する情報等が数多く発信されているなどの要因で、災害等に対する意識が高いと思われます。しかし、東日本大震災から8年が経ち、自分が居住する地域では、「今すぐに何か起きる」という感覚や危機感が薄れ、「まだ、自分は大丈夫だ」「この辺りは被害がない」などの油断が生じているのではないかと思います。
- 3 2で「十分にできている」「ある程度できている」とお答えの方に質問します。具体的に、どのような備えをしていますか。* () は、同様の回答数。以下同様。

小学部

- ・ 防災バックを用意している。
- ・ 防災リュックを用意して、時々中身を見直す。家族で、何かあった時の集合場所の確認。
- ・ 非常食・水を準備している。
- ・ 水、非常食、電池、トイレトペーパー、LEDライト。(2)
- ・ 防災用品、家族の集合場所、誰が学校まで迎えに行くかなど。
- ・ 備蓄水、防災グッズ、テント。
- ・ 災害時のマップをすぐに取り出せる場所に保管している。防災グッズをいつでも使えるようにしている。
- ・ 防災グッズ(非常食など)
- ・ 水、缶詰や火を使わずに食べられるもの、おむつや紙類を多めにストック。
- ・ 水は井戸があり、食料は、缶詰が多量にある。
- ・ 家具などの転倒防止の固定をしている。
- ・ 断水したときのためのペットボトルの水や、やかんの中に常時水を入れておく。懐中電灯やローソクの常備。乾パンの常備。

中学部

- ・ 防災食セット(家族分)、保存食、保存水の用意。
- ・ 備蓄水、防災グッズ、テントの備え。
- ・ 自宅に非常食の準備や家具の固定をしてある。また、一応、車の中にも少しの非常食などを入れてある。

高等部

- ・ 防災などに関する備品の準備や訓練を行っている。
- ・ 非常食、水、金銭。(5)
- ・ 水、食料の備蓄(1W分)日常から消費し、ローテーションしている。他、災害時に使えるものの備蓄。(電池、非常用トイレ、消毒液など)
- ・ 水(6本入りケース×5)、缶詰、カップラーメン、カセットコンロ+ガス、くるくる非常灯(手動式)、ランタン(ソーラー式)、ホッカイロ、ラップ、ブルーシートなど

[考察]

- ・東日本大震災以降、経験で得た情報やノウハウが豊かになると共に、避難所や各行政、また、企業などの取組が紹介されるなど、各家庭で備えを充実している様子が伺えます。また、「いつ、どこで。」「実際に災害が起きたら」などの視点で、各家庭にあった備えを、それぞれが工夫しながら行っているようです。

4 大地震などの自然災害に備えて、あなたが普段から行っていることはなんですか。

小学部

- ・非常食の準備、避難所を事前に決めている。
- ・水をペットボトルで買っている。カセットコンロを用意している。お風呂の水を捨てないようにしている。
- ・非常食（飲むゼリー・カロリーメイト・水など）を買ってある。
- ・災害時の、集合場所や連絡方法などを家族で話し合っている。
- ・少し大きな揺れの地震があった際、窓を開けるなどの逃げ道の確保。家の建物付近の大きな木の伐採。寝ている所には、大きなものや高さのあるものは置かない。
- ・荷物のチェック。
- ・トイレトーパーや水を多めに備蓄している。
- ・水、ガスコンロ、食料（缶詰・インスタント食品）、テント・寝袋。
- ・何もしてない。
- ・その場から動かないようにする。玄関から外に飛び出さない（ドアは開けておく）。（2）
- ・水、ミルク、食べ物（お菓子など）の備蓄。
- ・家族全員が、今どこにいるか、スケジュールの確認。
- ・水、ペットボトルの保管。
- ・天気予報の細めチェック、保存飲食物の賞味期限の確認、避難場所の確認。
- ・食料、飲料などの備蓄。（8）
- ・生活に必要なものは何か考える。
- ・地域の避難場所の確認を行っている。
- ・夜中に地震が起こると、朝までに水道が出なくなることが多いので、風呂の水は抜かず、朝に抜いた方が良いと言われたので実践している。（お風呂の水でトイレを流したり、手を洗ったりすることに使える。）（3）
- ・逃げる準備をすぐする。震度2ぐらいでもすぐ逃げる。
- ・メディアからの情報収集。
- ・逃げ道の確認。
- ・家族との集合場所や子供のピックアップ方法を決めておく。ある程度の持ち出し備品の整備。
- ・玄関に懐中電灯と防災リュックを置いておく。
- ・ガソリンの買い置き。
- ・避難所を確認する。
- ・使わなくなった布団や毛布などを捨てずにとっておく。水、食料、紙類を多めに買っておく。
- ・水や食料を鞆に入れて玄関近くに置いておく。

- ・非常食、水などの備蓄。大きな家具は、なるべく置かない。（冷蔵庫・テレビなどを固定しようと思いつつ、なかなかできていない。8年前の震災でガソリンがなくて苦労したのに、つい危機感が薄れ、ランプが付くまで走っている。）
- ・非常食のストック、使い捨ての食器、タオル、洋服類、オムツなどの必要なものは、まとめてリュックに入れてある。
- ・家に、ローテーションできる食品の買い置き。オムツの買い置き。
- ・子供の薬を常に色々な所に準備している。（食べ物も含む）
- ・非常用物品の準備。

中学部

- ・飲料水のストック、非常食の用意。（3）
- ・非常用電源、消火器、水、食料ランタン、ろうそく、石油ストーブ。
- ・飲み物、食べ物を備える。ガスコンロ、ライトなどの用意。
- ・給水用ポリタンク、カセットコンロ、ボンベなどの用意。
- ・防災バックを一つ用意し、そこに非常食や貴重品をまとめている。
- ・非常袋を用意しておいて、何かあった時はすぐに持って行けるように、玄関付近に置いている。
- ・節水、水の補給。
- ・飲み物を少し多めに買っている。
- ・非常食を備える。ガソリンをなるべく満タンにしておく。
- ・非常食、水、日用品などの買い置き。（しかし、足りているかどうか分からない）
- ・防災品を準備している。（食料ストック、生活用品ローリングストック）家族内の連絡方法確認、避難場所確認。
- ・飲み物を箱などで、まとめ買いして使用する。カップ麺などの食品を、ある程度数買い置きしておく。

高等部

- ・家族が、いつでも連絡が取れる状態にはしています。
- ・食料や紙類、ガスボンベや電池など常に多めに購入している。ガソリンやモバイルバッテリーを常に満タンにしている
- ・テント、災害食などの用意をきちんと行っている。
- ・特に何もしていません。（2）
- ・食料、水の備蓄。（5）
- ・乾電池を切らさない。保存食の賞味期限チェック。日用品を備える。
- ・車のガソリンを半分以上は入れておく。水分の確保。
- ・冬は、火の始末。寝る時に、逃げる動線に物を置かない。
- ・土のうの用意（豪雨）。車庫の強化（暴風）。石油ストーブ（停電）。
- ・飲み物の確保。卓上コンロ、ガスの確保。
- ・避難場所、携帯品の確認。
- ・緊急時における家族間での連絡方法や、避難場所などの確認。
- ・携帯の充電。

- ・水の保管、携帯ガスコンロとガスボンベの用意。
- ・安否確認、防災グッズの備え。
- ・家族内で避難場所の確認。水、チャージドリンク、ゼリー、煎餅などの準備。懐中電灯を近くに置く。
- ・風呂の水をためておく。飲料水を配置。カセットコンロ、常備薬をすぐに持ち出せるようにしてある。
- ・備蓄品など、すぐに食べられるもの（水、缶詰）を備えるようにしてある。
- ・いつでも逃げられるように、バックを用意しておくこと。食料品を確保しておくことです。そして、一番大切なことは、家族との連絡をどうするか考えておくことです。
- ・いつでも、何かあっても、どう動くかの話は常日頃からしている。非常時に役立つ情報を実際に見たりして実践している。小銭を多めに置いている。等々、子どもの障害を考えると、避難所に行けないと思っているので、それに頼らないように準備している。
- ・寝室にタンスなど、倒れてくるものを置かない。家が古いので、車をなるべく家の近くに停めない。（車がないと高齢の母を連れて避難できない）ガソリンは、半分になったら満タンにしている。（ガソリン難民になりたくない。）
- ・家族分の水、食糧の確保、また、障害児に必要な薬・日用品を多めに確保。
- ・脱出経路の確認。
- ・バック、テント、ストーブ、電灯、非常食（水・缶類）簡易トイレ、薬箱。
- ・車の燃料を早めに給油するようにして、供給がなくなっても、しばらくはもつようにしている。
- ・防災用品、食品を買いそろえておく。町の防災メールのチェック。ハザードマップの確認。
- ・高いところに物を置かない。
- ・ネットTVなどで情報収集する。少しずつですが、備品をそろえたりしている。家族での話しあい。
- ・お風呂に、水を貯めておく。（2）
- ・安否の確認。
- ・水の確保。
- ・飲み水の確保、非常食備蓄、避難所の確認など。

[考察]

- ・各家庭の状況や児童生徒の障害特性に合わせて行っている様子が伺える。また、東日本大震災当時は、ガソリンなどについては流通が難しくなり入手困難になった経験から、移動手段についての備えについて考えている家庭がありました。
- ・障害児者だけでなく、高齢者についても考えて準備している家庭がありました。
- ・家庭環境の改善（生活空間、居住空間）を図り、命をつなぐ行動を取っている家庭がありました。
- ・すべてにおいてこれが正しいとは言えませんが、それぞれの家庭で経験と工夫を重ねながらベストな備えをしていることが伺えます。

5 自然災害時に備えて、家族間のルールなどがありましたら教えてください。

小学部

- ・賞味期限が長い日常でも飲食できる食品を、消費・補充しながら一定量を備蓄している。
- ・避難所の確認をして、会社から学校のルートを見て、誰がどこに行くか前もって決めておく。
- ・自宅に被害を受けた時に、避難所などに誘導されても、居場所がない。（大声を出したりして、迷惑がかかる。）
- ・慌てず、落ち着いて行動するようにする。
- ・慌てて外に出たり、行動しない。
- ・それぞれの一日の予定の確認。子供に親の名前を覚えておいてもらう。
- ・食料や日用品などの生活に必要なものをある程度常備している。
- ・家に戻れないような状況の時は、家の近くの小学校に集合しようと決めている。
- ・子供と誰と一緒に逃げるかを決めてある。
- ・とりあえず、家に帰る。（歩いて）
- ・机の下に潜る。トイレ・お風呂が安心。
- ・子供に関しては、学校もしくは施設にいる際は、状況を確認しつつ、とにかく迎えに行く。（動きが取れる方が）
- ・（ルールなどが）ないので、決めないといけないと考えている。
- ・地震や津波が発生した時に、家族全員が同じ避難場所に逃げること。避難場所を確認し合っていること。家族以外の人に協力支援を依頼している。
- ・身を守る行動をとる。連絡先や連絡方法を決める。
- ・特に決めていない。
- ・地域の避難所に行く。災害伝言ダイヤルを利用する。
- ・部屋の1カ所だけ地震対策していないので、その部屋だけは危ないので離れる。机の下やテーブルの下に隠れる。
- ・避難場所を決めておく。
- ・場所を把握すること。避難場所を知らせておく。

中学部

- ・万が一、はぐれてしまった場合、家から一番近い中学校に避難するように伝えている。
- ・慌てず、落ち着いて行動するようにする。
- ・益子付近の地理が分からないので、何をどうしたらよいか途方に暮れる。モデルケースなどを示していただけたら参考になります。
- ・集合場所で待つ。
- ・地域の避難所の場所など、市で配られたハザードマップなどを見て調べてみたが、いざという時に、子どもを連れて行けるかどうかは、非常に不安を感じる。
- ・テレビなどで情報を得る。防災用品のチェック、家族で自然災害について話しあう。
- ・今は、決めていない。
- ・子供たちは、学校に迎えに行く。

高等部

- ・連絡が取れない時は、近くの小学校に避難する。
- ・集合場所で待つ。
- ・連絡を電話でとる。落ち着いて行動する。
- ・家族間で連絡を取り合う。
- ・家から外に出る。
- ・改めて自然災害時に起こりえることに直面し、考慮してみましたが、まだ、家族間での価値観が希薄しているため、ルールなど決めていないのが現状。
- ・もし、災害に遭った場合は、へたにその場を動かずに、連絡が取れるようであれば、まずは、連絡をする。
- ・子どもが学校の時は、〇〇〇をはじめに行き、その後〇〇〇とタイムラインを事例ごとに考え、家族で共有している。
- ・避難所を決めておく、携帯の災害用伝言板の活用。
- ・学校の時は、学校にいる。お母さんが家にはいないときは、近所の人と行動する。
- ・緊急連絡は、SNSを利用してなるべく簡潔にするようにする。
- ・指定避難所に行くこと。(2)
- ・その日に誰がどこにいるか、教えている。
- ・外で災害に遭ったときは、施設や学校などに行くよう話してあります。
- ・出かける時に、行き先は必ず告げていくこと、所在が分かるようにすること。

[考察]

- ・それぞれの家庭で長い時間をかけて、また、話しあいながらルールを作り上げてきている様子が伺えます。今後も、「命をつなぐ」方法を探っていき、確立してほしいと願います。
- ・家族間で、どのように情報を共有し、それを生かしていくか。各家庭での検証が望まれます。
- ・電気系統の損壊などがあつた場合の、情報共有についてもルールが確立できればさらに良いと考えます。

6 防災・減災に関して、現在あなたがお困りのことや知りたいことはなんですか。

小学部

- ・避難所へ行くことになった時に、大人は良いとして、障害のある子がずっといられる場所ではないだろうという不安。(5)
- ・8年前は、色々考え準備もしていたが、現状は、薄れてきている自分を反省し、また、少しずつ進めていくことを、これを機に思います。
- ・非常食で賞味期限の長いものは何か知りたい。
- ・自治会が消滅しているため、地域とのつながりは望めない。情報が、ネットなどに限られてしまう。地域的に、地元出身者同士と新規在住者に隔りがある。
- ・知らない場所になかなか入れない子どもなので、自宅が災害に遭って住めないとなると、車ぐらいしか居場所がない。(お金に余裕があれば、キャンピングカーを購入したいぐらい)偏食なので、限られた食料では十分でないかもしれない。命をつなぐ程度には食べて欲しいが、どうなるか不安に思う。

- ・避難することができない。（避難所に行けない）
- ・防災バックを用意しなくては・・・と思っているが、何を用意したら良いか分からない。

中学部

- ・避難所に、行きたくないです。
- ・避難所などでの集団生活になった時のことを心配しています。
- ・障害児を受け入れてくれる施設などがあったら教えて欲しい。
- ・避難場所はどこなのか、また、その場所の耐震は大丈夫なのか。
- ・自然災害時のバス利用の案内はあったが、学校で起きたとき、メールで連絡があるのかの是非、迎えに行くのかどうかの是非など、しっかり頭に入っていないので、マニュアルを周知徹底させる方法があれば・・・オロオロです。
- ・避難所に行っても、子どもが慣れない場所でおとなしくいられるとは考えにくいので、結局、車にいるしかないかもしれない。何とか子どもが落ち着いていられるようにしてあげたいと思うが、非常事態で、親の方も余裕があるかどうか自信がない。
- ・仕事上、帰ってこれない可能性がある。学校の耐震は、大丈夫ですか？
- ・災害時に、学校で食事ができるのか？冷たい食事があまり好きではないので・・・
- ・万が一、災害で自宅に住めなくなるような状況になくなった場合、子供の障がいの特性を考えると、避難所に行くのは難しいと思う。短期の車中泊は可能ですが、長期化した場合が心配です。

高等部

- ・子供が一人で留守番している時に、地震などが発生した時のこと。
- ・災害などで避難した時に、慣れていない建物（体育館・教室・公民館など）などで、うるさくしたり、騒いでしまったりするのが心配。（2）
- ・2～3日分の備蓄。
- ・防災について、知らないことが多い。
- ・日常生活上に、防災・減災に関しての意味すらもできていなく、調べてみました。防災・減災の携わりに、もう少し理解を深め、学んでいこうと思いました。他のお宅では、どのように防災・減災に取り組んでいるのか知りたいと思いました。
- ・やはり、家族が離れていた場合のことを考えると連絡が取れるかどうか？それが一番困るし、電気・水道などが使えなくなるのも困る。
- ・食料の備蓄などについて、賞味期限を過ぎた時に処分に困るのでどうすればよいか。
- ・どのような備えが必要なのか、どれくらい必要なのか知りたい。
- ・地域とのつながり。障害者への理解が少なく不安です。
- ・高齢者や障害者が安全に避難できるマップを毎年配布して欲しい。障害者用避難場所も知りたい。

[考察]

○困り感として

- ・障害児者の避難場所、避難所生活、居場所（特に、切実に感じました。）。
- ・連絡方法
- ・マップの作成、活用について→学校？役所？保護者？保護者目線のマップが欲しいと感じ

ました。（作ってもらうのではなく、自分たちで作る。）

○学びとして

- ・各家庭の取組（防災・減災の力の向上）
- ・防災減災についての学び（知識など）や体験

7 その他

小学部（記載なし）

中学部

- ・アンケートに答えることによって、何も準備していないことに不安になった。このアンケート重要ですね。
- ・東日本大震災の際は、本当に不安でした。残念ながらそれ以降、この近辺で災害に関して特に何か改善されたわけでもなく、喉元過ぎれば・・・という感じです。
- ・防災だよりで見ているだけなので、どういものかよく分からない。子供たちが参加している起震車体験や避難所体験など、保護者も一緒にできたらきっと貴重な機会になると思うので、是非お願いしたい。

高等部

- ・このようなアンケート、震災直後にやるべきだったと思います。
- ・障害、小さな子ども、高齢者の人たちへの地区の対応。
- ・障害者（弱者）が地元の避難所に行くことが困難だろうと思うと、どこへ行ったら良いのか？

[考察]

- ・このアンケートを契機に、各家庭の防災・減災に対しての見直しができる家庭があったことはうれしいところですが、現状から、我々は「なにを」「どこから」取り組むべきなのか、精査していく必要があります。また、PTAとして参加型・体験型の研修の設定や、生活圏のマップ作りなどの必要性を感じました。

（原文に近い状態で記載しました。）

このアンケートは、回答率が90%でした。保護者の皆さんの意識や関心が高い事が伺えました。皆さんのアンケートから読み取れることは、

- ・日頃から、自然災害に不安や関心があるが、備えについて十分とは言えないということ。また、東日本大震災以降も、様々な災害が各地で起き、メディアにおいて災害に関する情報が数多く発信されていることから、災害に対する意識が高まったと思われませんが、東日本大震災から8年が経ち少しずつ危機感が薄れ、「まだ大丈夫だ」「この辺りは、被害がない」などの油断が生じているのではないかと感じられる方もいました。
- ・東日本大震災以降、経験で得た情報やノウハウが豊かになると共に、避難所や各行政、また、企業などの取組が紹介されたことにより、各家庭の状況や子供たちの障害特性に合わせて工夫をしながら備えを充実されている家庭が見られました。
- ・東日本大震災当時は、ガソリンが入手困難になった経験から、移動手段についての備えについて考えている家庭がたくさんありました。また、自宅の生活空間や居住空間の改善を図ったという家庭もありました。
- ・それぞれの家庭で継続的に話し合いながらルールを作り上げてきているようです。今後も、「命をつなぐ」方法を探っていき、確立してほしいと願います。家族間でどのように情

報を共有し、生かしていくか。各家庭での検証が望まれるところです。電気・通信系統の損壊などがあった場合の、情報共有についても、ルールが確立できればさらに良いと思います。

- ・困り感としては、障害児者の避難場所、避難所生活、居場所の問題や連絡方法、また、マップの作成や活用などについて挙げられます。これらのことを踏まえ、今後の学びとしては、各家庭の取組状況の共有化、防災・減災についての学びや体験などがあります。
- ・このアンケートを実施したことにより、防災・減災についての見直しができた家庭があったことは、うれしいところです。現状から、我々は「なにを」「どこから」取り組むべきなのか、話し合いながら検討していく必要があると思いました。また、PTAとして、参加型・体験型の研修の設定や生活圏のマップ作り、緊急時サポートブックなどの必要性を感じました。また、今後のPTA活動をして行く上での、大変貴重な指針となりました。

② 防災教育の取組

[避難訓練、避難所体験]

本校では、地震・竜巻・火災などを想定した避難訓練を年4回実施しています。子供たちは訓練の時、とても真剣に取り組んでいます。消防署による煙路体験や起震車体験なども行っています。また、避難所体験は、体育館でさまざまな大きさの段ボールを使い、生活空間を自分たちで作ってみるなど、より実際のものに近くなるように心がけています。そうすることで、訓練から色々な問題点や改善点が見えてきます。避難所体験の中で、机に布をかぶせた「なんちゃってこたつ」を作ると、子供たちは喜んで足を入れくつろいでいました。危険な中にあっても、そういった「ホッとするもの」が必要なのだと改めて考えさせられました。

また、災害が登下校中にも起こることを想定して、それぞれの通学方法により、災害発生時にどう行動するか子供たち、保護者と共に対策を考えています。

「児童生徒と保護者が一緒に行った避難所体験」

小学部の高学年を対象とした「避難所体験」の授業は始まって3年になります。この授業が始まったのは平成27年度の中学部の授業からで、始めた理由は三つありました。一つは、本校の教育計画の努力点の一つに「児童生徒が安心安全に学べる学校環境づくりと、防災安全教育の実践を行う」が挙げられ、防災教育の充実に学校全体で取り組んでいること。二つ目は、毎年、地震や火事、竜巻等を想定した避難訓練を実施し、初期対応から二次対応へと児童生徒、教職員が一連の動きを確認することで、訓練の積み重ねが成果をあげていることから、次の段階として防災に関わる学習の必要性を感じたこと。三つ目は、東日本大震災での体験談等から、知的障害や自閉症のある子供たちは、その障害の特性から避難所で生活することが難しく、家族で車中生活をするなど大変な御苦労があったとの話を多々聞いたこと、そこで、避難所での生活を体験したり、防災バッグを保護者と一緒に準備したりすることで、防災への意識を高め、避難所での生活が必要になったときに少しでも安心して過ごすことができると考えて計画されました。これは保護者である私たちにとっても感じていたことであり、震災時の大きな心配事の一つでした。

現在では、小学部5・6年生と中学部全員を対象にこの授業を実施し、一人の子供が義務教育でおおよそ5回程度、避難所での生活を体験する継続的な学習が行われるようになりました。

そして、今年度は保護者にも「避難所体験をしてみませんか？」と案内があり、5・6年生の児童数の約半数である10名の保護者が、また、中学部は32名の保護者が参加しました。参加時の様

子や参加後のアンケートなどからも、これは、大きな一歩だったと思います。

授業の大まかな内容は次のとおりです。

- 1 「災害ってなに？」・・・ 災害にはどんなものがあるか児童が発表したり、地震、台風、津波、土砂災害などの写真を見たりして、災害とはどんなものか学習した。
- 2 「避難した後の生活」・・・ 避難した後に家に帰れない時や、水や食べ物がなくて家での生活が難しい時に避難所で生活をすることもあることを説明し、避難所の写真を見て学習した。
- 3 「避難所を作ろう」・・・ 体育館で学級ごとにダンボールを使って居住スペースを作った。できあがった居住スペースで非常食の缶詰パンやおかゆの試食、非常用トイレの体験、ダンボールの上で寝る活動を行った。
- 4 「感想を書こう」・・・ 避難所での生活を体験した感想を用紙に一人ずつ書き、発表した。私たちは、3「避難所を作ろう」の内容を行い、小学部では、保護者10名で協力して自分たちの居住スペースを作り、非常食の缶詰パンの試食や非常用トイレの体験、ダンボールの上で寝る体験をした。また、中学部では、保護者32名が4班に分かれて、自分たちの居住スペースを作ったり、非常食のフルーツ缶やようかんの試食、非常用トイレの体験などを行った。



<非常用トイレ>



<缶詰パンの試食>



<避難所作り>



<ようかん・フルーツ缶試食>

授業体験後に、授業の感想などのアンケートを記入しました。結果は次のとおりです。

1 「避難所の生活の一部を体験していかがでしたか？」

(小学部)

- ・ダンボールを使用して自分達の部屋を作り、かこいがあることで多少の安心感がありました。
- ・初めての体験でした。ダンボールで家を作るのにも知識のある方がいないと、効率良く作るのは難しいと思いました。
- ・トイレの体験ができて良かった。
- ・ダンボールがあるだけで、だいぶ過ごしやすくなりました。が、何日も過ごすのはキツイかな・・・。
- ・ダンボールの枚数、たくさん使うんだなと思いました。
- ・いざとなったらできないと思うので、いい体験ができたと思う。
- ・ダンボールなどいざという時には、沢山集まらないので、それが到着する間は大変だなあとと思いました。
- ・とても貴重な体験ができて良かったです。(2)

(中学部)

- ・ダンボールが思ったよりも温かく、作るのも扱いやすく良い経験ができた。
- ・体育館は広く、壁を作るのに一苦労だった。
- ・突然避難所を作ると聞いて驚いたが、災害が起きたらそのようなことは言っている場合ではないので良い経験になった。
- ・見たり聞いたりしているのと実際に自分たちでやってみるといろいろな難しさや大変さを実感できてよかった。
- ・何が必要か、体験してみて初めてわかること多かった。寝る場所、男女別にすることなど男性がいないため思いつかなかった。
- ・「こういったものがあつたらいいな」や「こうしたらよいな」など色々な物を発見することができた。
- ・他のグループの避難所作りをみて、自分たちにはない発想やアイデアがあり勉強になった。
- ・普段から備えや心構えをしておくことが大切だと思った。
- ・気心知れたお母さん同士で文化祭の準備をしているようで楽しかったが、実際に非常事態で子どもを連れて避難することを想像するととてもこんな余裕はないと思った。
- ・寝るスペースやプライバシーを保ちながらどんな風に空間を作つたらいいか苦労した。こういう経験はなかなかできないので充実した体験だった。
- ・オープンな空間だけでは落ち着かず布やダンボールで仕切った場所はほっとした。

2 「非常食に用意した缶詰パン (小学部) ようかん・フルーツ缶 (中学部) はいかがでしたか？また、おすすめの非常食などありましたら、教えてください。」

(小学部)

- ・試食した缶詰パンは、とてもやわらかくて味もおいしかったです。(ビスコの缶詰は

おすすめです。)

- ・普通においしかったです。
- ・とてもおいしくいただくことができました。(2)
- ・缶詰パン、思ったよりおいしかったです。お腹にたまり、非常食良かったです。
- ・缶詰とは思えない。
- ・おいしくいただきました。これならば、いざという時、抵抗なく食べられると思いました。
- ・とてもおいしかったです。買って家の非常食にしたいです。
- ・しっとりしてておいしかったです。
- ・水を入れればごはんができるもの(フリーズドライ)、ピラフ、チャーハンなど。

(中学部)

- ・消化がよくカロリーのあるようかんやさっぱりしたフルーツ缶で美味しかった。
- ・甘い物ばかりで塩気のあるものが食べなくなったが、支給される物に文句は言えないので大変だなと思った。
- ・おやつ的な感覚だが、疲れているときには甘い物があるとよいなと思った。機会がないとあまり食べないものだった。
- ・缶フルーツは夏にはよいと思う。家でも常備したいと思う。
- ・改めてリュックに入れる非常食について考えさせられた。まだまだ必要なものがありそうだと思う。
- ・ようかんは開けやすく食べやすいパッケージで工夫されていた。手が汚れにくいのがよい。

3 「防災・減災について、保護者の方と学校が連携してできそうなことはどんなことがあると思いますか？」

(小学部)

- ・避難訓練を行い、保護者と学校の連携を良くする。
- ・あまりないと思う。
- ・今現在おこなっていることで良いと思う。その中で色々な事がみえてくると意見が出てくると思う。

(中学部)

- ・実際、体験された地方の活動を知る機会もあるとよい。
- ・益子特別支援学校に在籍している生徒に特化した保存版の「防災ハンドブック」の作成。
- ・一斉には無理だと思うが、避難所一泊体験などしてみたい。
- ・校内や通学路に危険な場所がないかのチェック。
- ・毎年防災について訓練や話し合いをしていくこと。
- ・必要な物があれば、もっと保護者に求めてもらって良いと思う。
- ・不要なマットなど使えそうな物を集めておく。
- ・防災リュックの大切さを改めて認識した。中身や使い方を保護者と先生と話し合いやすいわせをするとよいと思う。

- ・保護者にはそれぞれ得意な分野があると思うので、それをうまくグループ分け（力仕事班・炊事班など）できたらすごい力になると、今日の保護者のてきぱきとした動きを見て感じた。
- ・防災備品を準備することも大切ですが、災害に巻き込まれる場所は選べない。もし、外出先で災害に遭った場合などに備えて、災害時の連絡方法や誰に連絡するのかなどを決めておく。

4 「防災・減災について、保護者同士で協力できそうなことはありますか？」

(小学部)

- ・回答はありませんでした。

(中学部)

- ・訓練とは違い、実際に災害が起きたとき私たち保護者も、子供たちはそれ以上に混乱すると思う。障害者の支援方法を知っておくとよい。
- ・東日本大震災の時は自分の生活で精一杯だったので、自分のできる範囲で役に立てることがあったら、是非協力したい。
- ・近くに住んでいる方と密に連絡を取り合って情報共有する。
- ・困っている時にお互い助け合いができるような日頃からのネットワーク作り。
- ・PTAで防災委員会を立ち上げてはどうか。
- ・防災品や非常食の情報交換や避難所、危険な場所の情報交換。
- ・電話やライン、メールでの情報交換など。
- ・お互いの子供の性格特性を理解し合い、何かあった場合、自分の子供以外に対応できるようにすると良いと思う。

アンケート結果から、「初めての経験ができて良かった」「貴重な体験ができて良かった」という意見や「実際に避難所で生活することは難しいかもしれない」という意見があり、ダンボールを



使用した居住スペース作りや非常食の試食をしたり、ダンボールの上で寝てみたり、非常用トイレを使用したりなどの生活の一部を体験することで、避難所での生活を少しイメージできたようでした。また、「避難所体験を通して保護者同士いろいろ考えたり、話合いの機会があって本当によかった」「親同士での交流がもて有意義だった」という意見や「実際に体験することで万が一の時に迷いなく動けると思う」など保護者の防災対策に対する意識の高さを感じました。また、参考に防災マップや防災バックの中身を通路に展示したことで、「もう一度自宅にある防災バックを見直したいと思った」などの感想をいただきました。

非常食として準備した小学部で試食した缶詰パンは、「おいしかった」「家でも準備したい」などの感想があり、大変好評でした。この缶詰パンは、本県にあるパン屋さんで販売しているもので、長期の保存が可能なパンです。缶詰には、「災害用伝言ダイヤル171」の利用方法も示されており、災害時の混乱時にはありがたい心遣いだと思います。また、中学部で試食したようかんやフルーツ缶に関しては、甘い物の非常食は、避難所生活では心が潤うと思う。また、フルーツ缶を非常食にするアイデアが参考になった。また、フルーツ缶の中の汁も貴重な水

分になるとグループの話合いで共通理解を図った、などの感想がありました。

「防災・減災について、学校と保護者、保護者同士で連携したり協力したりできること」については、実際に体験された方の話を聞いたり、地方の活動を知る機会があると良い。また、このような体験をしていくことが、親の防災意識が高まると共に、保護者が受動ではなく学んだことを実践していく行動力が重要である、などの意見がありました。

また、授業を行った教職員に実施したアンケートでは、「保護者と一緒に避難所体験をしてどうでしたか」の問いに、「子供たちが非常食を食べている様子を見て安心していただけた」「他の児童の防災リュックの中身を見て参考になるとのことだった」「保護者の方にも貴重な体験の場となるので、今後も続けていけると良い」との意見があり、保護者にとって有意義な活動であったことが教員側からも受け取れました。今後、継続して実施していくことで、保護者の体験者数が増え、防災・減災の意識が向上し、保護者同士のつながりなどに発展していくことが期待できると考えます。

[防災研修]

夏季休業中に、栃木県県土整備部砂防水資源課職員2名をお迎えして「土砂災害防止出前授業」と題し、職員研修と合同で行いました。私たち保護者は、24名の参加がありました。

講話の中で、実際の写真や映像を見ながら土砂災害の紹介があり、平成30年度には、全国的に約3,500件の災害があったこと、また、私たちが住む芳賀郡でも、地滑りがあることがわかりました。さらには、災害に備えるために、防災の備え、避難などの「知る努力」の重要性や「自助」「共助」「協力」について改めて考えることができました。

終了後のアンケートからは、全国的に災害が多発していること、また、改めて自然災害の怖さを知ることができた。この研修を機に、家族と確認したい、過去の体験談や教訓を聞きたい、避難行動のマニュアル、避難所体験、マップ作りなどに取り組んでいきたいといった感想がありました。

平日の開催にもかかわらず、20名を越える参加者があったこと、職員と保護者が情報の共有ができたこと、また、つながりが広がったことなど、少しずつですが「防災・減災」についての関心の広まりを感じました。

また、令和元年11月13日（水）、第2回PTA研修会を行い、栃木県立防災館に行ってきました。21名の保護者が参加し、防災について学びました。

始めに、職員の方から栃木県立防災館が建てられた目的に関する説明を聞き、防災・減災の大切さを学びました。説明の後には震災のVTRを視聴し、参加者は被害の様子を真剣に見ていました。



また、強風・煙・地震などの体験も行いました。模擬体験をすることで、身をもって災害の怖さを知るとともに、備えの重要性を感じることができました。また、参加した保護者からは、「とても怖かった」、「昔と今では避難をする際の教えが異なっていて、勉強になった」といった声が、多く聞かれました。

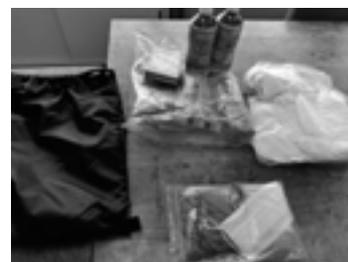
[引渡し訓練]

引渡し訓練は、校内放送で緊急地震速報を流し、地震を想定した避難訓練を行い、児童生徒がグラウンドに避難し待機しているところに保護者が迎えに行くという方法で行われました。訓練でも、できるだけ本番に近い状況を設定し、職員の配置、準備物などは最低限に抑え、「児童生徒を無事に引き渡す」という考えで職員、保護者が状況に応じ、各自で考えた行動ができるように訓練が行われました。



本校保護者も年々防災意識が高まっており、今回の訓練も無事に行うことができました。今後も反省改善を重ね、様々な災害時を想定し、各自がその場に応じた行動を取り、児童生徒の安全を確保できるよう取り組んでいきたいと思ひます。

[防災グッズ、備蓄品]



防災グッズについては、各家庭でヘルメットをはじめ水分や軽食を用意し、児童生徒の在籍する教室に一年間常備します。学校で一律に同じものを用意するのではなく、児童生徒の好みを考慮して1～2日程度しのげる物を各家庭で用意しています。また、それ以外の備蓄品については、PTAの予算から、年間5万円（令和元年度実績）を災害対策費として計上し、学校で必要な物品を検討し購入しています。防災対策の予算が少ないため、まだまだ備蓄品が足りていないのが現状です。

③ 地区活動の取組

地区活動は、現在、5地区に分かれ、親睦を図りながら、年3～4回の活動をしています。年度当初の顔合わせの時に、年間の取組のテーマを設定し、活動を決めていきます。その中で一回は、防災・減災についての活動を取り入れ研修や体験を行い情報の共有化を行っています。



ある地区の取組からは、地区活動を行った数日後に大型台風が通過する予報となっており、河川近くに住む方もいましたので、市から配布された防災マップで避難所や福祉避難所、洪水発生の場合の想定浸水深の表示などの確認をしました。また、子供たちに学校に持たせている非常食や、各自自宅にある非常食を持ち寄って数点を試食しました。学校に持たせているものは水や電気が使用できないと仮定している為カップラーメンやパックのごはんは無理なため、子供が食べてくれそうな物で賞味期限がある程度長いものを選びなくてはならず、偏食がある子は難しいように思ひます。自宅保管用のものは、賞味期限の長い非常食も良いのですが、日ごろから使える缶詰や、1年ぐらい保存のきくレトル



トパウチ食品を利用するのも良いという話がありました。人数が集まれば、非常食の種類も豊富になります。非常食は乾パンであるというのではなく、各家庭の家族構成にあった非常食の準備が必要だと思いました。

また、東日本大震災当時を参加者で振り返り、当時の過ごした様子を話し合いました。東日本大震災のあった8年半前、小学部の保護者の方はまだ子供が産まれてなかったそうです。また、当時小学部だった方は、学校の個別懇談中に地震があったそうです。

地区活動は、小学部・中学部・高等部と年齢に幅のある保護者の方と密に話すことができることを考えると、良い機会だと思います。併せて、今年度の初めに、防災・減災に関するアンケートがあったり、学校での保護者体験型の避難訓練を実施していただいたりしたので、その都度防災・減災について考える機会をいただけたのはとても貴重だと思いました。結局は何かの時の為に準備や心構えをする・しないは、個人の意識の問題ではあると思うのですが、学校やPTAからの働きかけは必要だと思いました。

3 成果と課題

以上のように、今年度のPTAでは、様々な「防災・減災」に関する、「見る・知る・体験すること」を中心に取組を行ってきました。この調査研究から、次のような成果と課題が見えてきました。まず、成果としては、次のことが挙げられます。

- ① 引渡し訓練については、参加者の増加やスムーズな引渡しが行われるようになり少しずつ定着が図られてきています。保護者の皆さんの意識の向上が見られます。今後も、反省や改善をしていき、さらにより良い形になるよう協力していきたいと考えています。
- ② 学校で、保護者が体験した活動や研修がもとになり、家族と情報を共有したり、地区活動につなげるなど、防災・減災についての保護者の意識が高まってきました。手探りではありますが、みんなで知恵を出し合って企画をし、「見る・知る・体験する」ということが少しずつ行われるようになってきました。学校での防災教育への参加を継続することで、保護者の意識の向上が少しずつ図られ、そして、その体験が、家庭や地域での取組のさらなる充実につながると考えます。今後も、積極的な研修への参加や地区活動の取組の工夫をしていきたいと思っています。
- ③ 年間を通して、「防災・減災」をテーマとしてPTA活動をしてきたことで、保護者同士での情報の共有化やPTA活動に対する取組が活発になってきました。少しずつ、保護者と学校が連携をして、一つのテーマを追求していくことは、素晴らしいことだと考えます。

課題としては、次のことが挙げられます。

- ① 家庭での防災・減災への意識を高め、さらなる充実と深まりを図っていくこと。「防災・減災」というテーマはとても広く、限られた時間では十分な成果を求めるのは厳しいのが現状です。しかし、さらに保護者のニーズを掘り下げ、あらゆる分野ごとにテーマを絞り活動をしていくことで充実した形となると考えます。
- ② 引渡し時の安全確認、特に安全に児童生徒を学校に迎えに行き、安全に各家庭に帰るために、それぞれの地域をよく知る必要があること。そのためには、研修委員会や地区活動との連携を図り、各地区ごとに関係機関と連携し、防災・減災についての研修を充実させたり、避難所での食事体験活動（非常食、炊き出しなど）や避難所体験をすることも必要であ

ると考えます。また、緊急時サポートブックなどの作成、活用、子供と保護者が一緒に活動できる内容の開発など、一つ一つの取組を充実させていく必要があります。

- ③ PTAとして、役員会、理事会、研修委員会を中心にさらに主体的に取り組み、それぞれの取組を定着させていけるよう、組織作りや内容の検討、及び、学校や地域・関係機関との連携協力を行うことが重要だと考えています。また、私たちが一年間で形にしてきたものを、次のPTA役員たちにどうつないでいくのか。防災減災についてだけでなく、PTA活動を盛り上げてくれる、また、各地区での取組を積極的に推進してくれる次世代の発掘も急務となります。

4 おわりに

全国的に、太平洋沿岸（茨城沖、福島沖、宮城沖）での地震や自然災害の発災確率が高くなっています。また、気象の変動により、夏の猛暑や冬の雪の降らない場所での突然の降雪、一昔前とは全く違うゲリラ豪雨やスーパー台風などが起こり、これまでのマニュアルでは対応できない事態になっています。そこで、私たちは、内陸部に生活しているとは言え、子供たちを守るために、常日頃から柔らかな発想で、臨機応変に対応していかなければなりません。

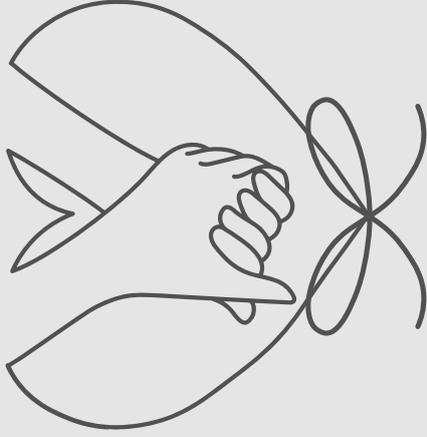
今日何ができるかを常に意識しながら、できることを無理せず「主体的に楽しく」参加できるPTA活動を続けていきたいと考えています。今できることや取り組んでいることは、いずれみんなの役に立つと信じています。

本校の取組は、まだまだスタートしたばかりですが、今回の調査研究を礎にして、今後さらにPTAの防災・減災についての取組が、充実、発展することを願っています。



保存版

緊急時 サポートブック



栃木県立益子特別支援学校
PTA

[家庭版] 備えておこう (^_^)/

- ◎災害から、家族を守るために、日頃から少しずつ準備をしておきましょう。
- ◎準備ができたら、チェック☑しましょう。

非常持ち出しとして（貴重品は必須）

品 物	チェック	品 物	チェック
飲料水（人数分×3日）		LEDライト	
非常食（人数分×3日）		衛生用品（マスクなど）	
携帯用充電器・乾電池		着替え、タオル類	
ポリ袋、給水袋		お気に入り（安心）グッズ	
薬・処方箋のコピー、お薬手帳		ウエットティッシュ、トイレットペーパー	
簡易トイレ（猫砂）		サポートブック、SOSファイル等	
使い捨てカイロ		家族写真・情報	

*コンパクトに！

非常備蓄品として（自宅・物置・車内などに）

品 物	チェック	品 物	チェック
携帯充電器（DC電源対応品）		テント	
ラジオ、懐中電灯、予備電池		寝袋、マット	
ラップ、ガムテープ		ジャッキ	
卓上コンロ・ボンベ		発煙筒	
ロープ、防水シート		工具（バールやスコップ等）	
軍手		衣類、毛布	
ヘルメット		新聞紙	
救急セット		簡易トイレ、ウエットティッシュ	
非常用持ち出し袋		ガソリン	

*ガスボンベは、危険なので車の中には置かないようにしましょう！

血液型	愛称
型	
持病、現在治療中の疾患	
薬の情報（いつ、何を、どれくらい）	
アレルギー情報	
かかりつけの医療機関1	電話番号
病院名	担当医
かかりつけの医療機関2	電話番号
病院名	担当医
その他の医療情報	

本人の特徴

障害の内容

こだわり（言葉や行動のくせ）・習慣

休日に出かけることがある場合、休日版も用意しましょう。
地図は手書きや、インターネットの地図を活用することも可能です。
また、危険箇所などを書き加えておきましょう！
（家から避難所までのルートなども用意すると良いでしょう。）

コミュニケーション

苦手・嫌いなこと（もの）

通学路地図

*児童生徒の通学路の概略を記入してください。
家と学校間の移動経路、通学方法（交通機関）、だいたい時間の経過（登下校それぞれ）等を書き入れます。次に、経路上で児童生徒が助けを求められる施設（指定避難所、交番、子供110番の家、あるいは親戚や知人の家など）を書き加えます。

不安やいらしている時の様子

好きなこと（もの）・落ち着くこと（もの）

緊急時の支援者の関わり方

情報の伝え方

本人への質問の仕方

食事の時

排泄の時

やってはいけない関わり方

パニック時やいらいらした時の落ち着かせ方

その他